

特別寄稿

研究者と教員の狭間で揺らいだ40年

吉川 元
広島市立大学広島平和研究所特任教授

1. 「我慢」と「理論」

生来、弱気だった。しかし、喧嘩となると負けん気が強く、むきになって攻めに転じた。私は、小学校4年生から隣町の小学校へ転校した。この転校は、その後の自分の生き方に大きな影響を及ぼしたと思う。3年生3学期、担当教員の産休で代用教員としてわずか1カ月だけお世話になった幸本靖子先生が、私の転校を勧めてくださった。というよりも、先生が自ら率先して転校手続きを取られたということの後から知った。しばしば校内で、また学校の校舎の下の川原や、下校途中の神社で、上級生から暴行を受け、いじめにあっていたが、上級生からの「呼び出しのあった時」は、箒やこん棒をもって戦った。こうした私の素行を見かねた幸本先生が私を隣町の小学校に転校させたのである。その時の先生の別れの言葉が、「けんかになって、はらが立っても、すぐ手をださないように、がまんすることがたいせつなんですよ」との諫め言葉であり、また音楽は歌うだけでなく「理論」があるとの、当時の私には難解な激励の言葉であった。以後、「我慢」と「理論」は私の脳裏に焼き付き、幸本先生の手紙は今日まで私の座右の銘となった（参照、巻末資料）。

その後、進学した修道高校3年の秋から卒業するまで経験した学園紛争で、私は初めて挫折感を味わった。順調に進んでいた受験勉強であったが、学校は封鎖され、その間、「自主討論会」に向けて夜な夜な、わら半紙に自己主張を書き綴り、ピラをまき、自己主張したあの日々。眠れぬ夜が続いた。世の中には思うようにならないことがあることを認識したものである。そして目標を失い、読書三昧の浪人生活の間に、社会の仕組み、あるいはあるべき国家像について考えるようになり、当時の若者のご多分に漏れず、共産主義に興味を抱いたものである。

上智大学外国語学部ロシア語学科に進学したのは、ソ連研究と国際関係論（副専攻）の研究に取り組むことを考えてのことだった。しかし、入学後1年で大学を休学し、イギリスを中心にヨーロッパ各地を旅した。世界に目を向け、今のうちに見聞を広めておこうと考えたからである。おそらく父の影響もあったのだろう。旅した1年間は、自分を見つめ直す良い機会となった。言葉はろくすっぽ通じず、確固たる信念や自説を持っていない自分にとって、異国での生活は、改め

て人間とは、自分とは、人生とは、といった根源的な問題を考えるきっかけとなった。そうこうしているうちに、ロンドンの書店で、*Trotsky: A Documentary* (Penguin Books, 1972) に出会った。ロシア革命の指導者の一人、レオン・トロツキーは、権謀術数のスターリンに敗れ、国外追放となり、やがてスターリンの追っ手にメキシコで刺殺される。その間、革命の同志が一人去り、また一人去り、追い詰められていく中、弱気になり妥協して周りの目を気にし始めていたトロツキーを戒めたのが、彼の友人で初代駐独大使アドルフ・ヨッフエであった。ヨッフエは、トロツキーに対して「君は正しい、安易に妥協をするな、一人になっても自分の意志を貫け」といった趣旨の手紙を書き残し、自殺する。ロシア革命に興味を持っていた私は、このヨッフエの言葉に感銘した。小学校転校時の幸本先生の「我慢」とともに、その後、「一誠以貫」、つまりおれずにまっすぐ前に進むべし、が私のモットーになる。

学部学生の70年代前半には、東西関係は「デタント」時代に入り、同時にソ連の反体制派活動家の書いた地下出版物(サミズダート)が西側に漏れ伝わるようになる。当時、ソ連の作家 A. ソルジェニーツィンの『イワン・デニソビッチの一日』を読み、またソ連の「水爆の父」と呼ばれた A. サハロフのエッセイに出会ったのもこのころである。高邁な理想を説き、世界の若者を引き付けた社会主義体制の現実、人間を抑圧し、人権侵害の上になり立つ全体主義体制であった。自由、人間の安全保障、国際平和、国際安全保障を、国家ガバナンスの仕組み、権力の正当性、あるいは地域ガバナンスの仕組みと制度化といった視点から考えるようになったのもこのころである。

学生時代、遊びすぎた。アルバイトもしすぎた。親元を離れてから自活していた私は、生活費や学資に必要以上のバイト代を稼ぎ、学業から外れ、そして気が付けば卒業の年の1975年を迎えていた。オイルショックの後で、なかなか就職も厳しい時代であったが、それに加え教職課程から脱落したため(教育原理2単位だけ取得)、他にこれといった職業は私の関心を引かなかった。ところが、この年は、結果的には、人生の歩む道を決定づける節目の年であった。8月1日、欧州安全保障協力会議(CSCE)の最終合意文書の「ヘルシンキ宣言」が採択された。世は平和到来とデタント歓迎ムードの中、先述のサハロフたちはデタントに反対し、ソ連との国際協力、東西友好関係に異議を唱えていた。なぜだろうかと考えた。この年、終生の研究テーマ、すなわち CSCE/OSCE(欧州安全保障協力機構)に出会うことになった。しかも秋口から私には夢のような出来事が目の前で展開されつつあった。10月15日の初優勝に向けた広島カープの快進撃である。初めて自分の心中に、広島アイデンティティがあることに気がつき、夢は見るもの、夢は叶うものとの確信を得て私は大学院に進学することにした。

2. 大学院時代

私は一橋大学大学院法学研究科に進学した。当代随一の外交史家かつ国際関係論研究者として名声が高かった細谷千博先生の門をたたいた。この時期は「デタント」によってソ連・東欧の共産主義体制の綻びが内部から告発されるようになったことから、私はソ連の政治的反体制問題に興味を抱くようになるとともに、ヘルシンキ宣言を機に始まったCSCEプロセスやヘルシンキ運動にも強い関心を寄せた。ソ連と東欧の「社会主義共同体」の発展を、ソ連の力による東欧支配(=パックス・ソビエチカ)の国際政治理論の視点から、そして反体制問題を統治システムやガバナビリティの政治理論の視点から、分析を試みるようになった。同時に、Nathan Glazer and Daniel P. Moynihan, *Ethnicity: Theory and Experience* (Cambridge, Mass, 1975)との出会いも、国際関係論の研究を進める上で衝撃的であった。国際政治の動態を分析する新たな視座を与えてくれたからである。単に政府間関係や外交関係だけでなく、エスニック政治の視点から国際関係を分析することも重要であることに気づかされた。イデオロギー対立に関心を奪われていた時代に、エスニック政治の視点から国際関係をみるようになったことで、冷戦後のエスニック紛争、民族の分離独立、あるいは「新戦争」の背景をより深く理解できるようになったと思う。

1978年に博士後期課程に進学すると、その年の秋から、カナダのトロント大学大学院 Ph.D. コースに2年間、留学した。当時、トロント大学は、アメリカのコロンビア大学と並ぶスラブ研究のメッカであった。私はトロント大学のG. スキリング教授のもとで指導を受けることになった。スキリング教授からは、研究者として二つの重要な心構えを学んだ。一つは、研究姿勢である。毎週、学生との面談時間で、自らに課した研究レポートの添削を含め指導していただいたが、その際の教授から口癖のように指摘された“Gen, meticulous!”という言葉が私の脳裏に焼き付いている。実証的に論を進めなさい、という教えであった。もう一つは、体制に迎合せず、常に政治を科学的に分析するという手法である。これは二度目のトロント大学客員研究員時代の話だが、教授は、民主革命後に大統領になるV. ハベルたちの憲章77の人権運動を精神面でも学術面でも支えておられた(H. Gordon Skilling, *Charter 77 and Human Rights in Czechoslovakia*, London, George Allen & Unwin, 1981)。憲章77の文書の運び屋がチェコスロバキアからドイツ国境を越え、ドイツのある町に到着したら「成功の電話」が入ることになっていた。電話を待ちわび、ついに夜遅く「成功の電話」が入ると、シャンパンで乾杯したその席に一度ならず同席させていただいた(スキリング教授は、民主革命後、1992年、チェコスロバキアから最高位の勲章 Order of the White Lion を授与された)。教授が、反体制活動家を支援し、ヘルシンキ運動にかかわっておられたことも手伝

い、私は欧州安全保障会議プロセス（CSCE プロセス、またはヘルシンキプロセス）の研究にますますのめり込んでいった。

3. 教員と研究者の狭間で

私は、1982年4月、広島修道大学に赴任した。初めて教壇に立つことになった。教員生活の始まりであった。もう生活費の心配なしに、心おきなく研究と教育に励むことができると意気込んだのを思い出す。広島修道大学に15年勤め、その後、神戸大学、上智大学、そして広島市立大学広島平和研究所での、合わせて40年間、研究と教育に励む機会に恵まれた。この間、ソ連の反体制問題に、また CSCE プロセスに関心を持っていたことが、その後の、平和とは何か、誰の安全保障なのか、といった根源的研究テーマの分析に役立ったと思う。

とはいえ、振り返るに教員と研究者の両立を目指すことに悩み続けた40年であった。実は、大学院生のころに吉村昭『冬の鷹』（新潮文庫、昭和51年）に出会ったが、同書は、駆け出しの教員の私には、研究者と教育者のあるべき姿について随分と考えるきっかけを与えてくれた小説である。前野良沢が中心となって翻訳したという『解体新書』であったが、訳者名には杉田玄白の名前しかない。前野良沢の名前はなかったのである。翻訳がまだ不十分なことをもって、早期刊行に前野良沢が反対したからだ。『冬の鷹』には前野良沢と杉田玄白の対照的な人物像が描かれている。学究肌の前野良沢は、社交性に欠け、一途に研究に励むタイプで、晩年は貧しく、弟子にも恵まれず、寂しくこの世を去る。一方、社交性が高く、処世術に長け、名声を博し、多くの弟子に囲まれて逝った玄白。対照的なこの二人の人物像に、時折、自分の進むべき研究者像と教育者像を重ね合わせてみた。こうした二人の対照的な人物像は、実は身近にもいくつもの事例があった。教職を優先すれば、なかなか研究に時間が取れない。研究に没頭すれば、教育が疎かになる。終わりのない仕事にのめり込んでしまうからだ。今、振り返るに、私は前野良沢と杉田玄白の二人の人物像の狭間に揺れ続けてきた40年の教員歴であったと思う。十分な指導ができず、志半ばで大学院を去っていった学生たちには申し訳ないと、今も責任を感じる。もう少し寛容であればよかったと、反省しきりである。締め切りに間に合わせるために中途半端なまま原稿を提出したことも多々ある。そうした時には、前野良沢のお叱りと、スキリング先生の“Gen, meticulous!” の呼び声が常に頭をよぎったものである。

4. おかげさまで

幸本先生の「理論」と「我慢」を心に刻み、村から町へ、広島へ、東京へ移り、

そして世界各地、特に紛争地帯を訪れ、教員として研究者としての40年を今終えようとしている。多くの師匠、先輩、同僚、そして学生たちに支えられ、おかげさまで今日までやってこれた。やっと退職の時を迎える。多くの人の支えと犠牲の上に、今がある。感謝とともに懺悔の気持ちでいっぱいである。特に、母の自己犠牲に報いることができなかつたことを今も、心苦しく、申し訳なく思う。問題児の私を厳しくも温かく見守り、着物の仕立てで毎夜の夜なべで、広島では当時もっとも授業料の高い修道中学・修道高校へ通わせてくれた母。私は、研究を優先させるあまり、母の恩に報いることができず、大学を移り変わり、母は孤独で寂しい日々を送り、逝った。合掌。

吉川君へ

元君はこのルーズリーフをあげようと思
います。(元君が、私のルーズリーフを
みて、きょうみをもっていただけです。中
の紙は、なくなったり、賣っています。)

元君といっしょにおんきょうをしたのは
一ヶ月でしたが、先生のいうこともよく
きいてくれましたし、よくおんきょうも
しました。

いじわるを言われても、あいてにしないよう
よくおんきょうしますね。

もうすぐ、
四年生、一部小学校で、はじめ、さびしいおも
いをするところがあるかもしれませんが、みんな
なかよくしてください。ケンカになつて、
はらがたつても、おんきをたざないよう
に、かまんすることもないせうなんです。おとな
になつてもおなじです。このことは、元君が、
だんだん大きくなるにつれて、わかると思
います。
理科と音楽が少しおくられていると思
います。音楽は、うたうだけではなく、た
いせつなべんきょうもあるのです。(理論(ろん)とい

わからないところは、はずかしがりやに
どんどんしつもんして、しつかりや
つてください。

一部の間は、役場にお父さまをいら
しやるのですし、さびしいことは
ありませんよ。ぬ。いどう車
などがたくさん通りますから
気をつけてください。からだに
気をうけて、しつかりお勉
強(べんきょう)するのですよ。

元君は、体育も本変たいへん
じょうずです。からへしつかりや
つてください。私(わたし)も、元君が、元
気で、おんきょうをしたり、
運動(うんどう)をしたり、できる
ようにはいって、おんきょう
からぬ。

おとうさま、おあさまに、よろしく
おつたえください。
それでは、さようなら、さよう
なら

三ノ丁

幸本靖子